

## 人知の及ばぬ人生を 歩む私達

2ヶ月の入院生活を経て、お陰さまで住職が無事に帰還しました。皆さまからは多くの励ましのお言葉を頂戴し、あらためて感謝御礼申し上げます。また、ご心配とご迷惑をおかけしましたことを心よりお詫び申し上げます。

十四kg体重を落としながらも、住職が無事に、そして元気に退院してきました。

「わざわざ転じて福となす」とも申しませんが、まさに至言です。

住職不在の中で、見えないモノが見えるようになったり、こなせないう事がこなせるようになるかもしれません。というのも、7月・8月は、お寺にとつて年間最大の行事『お盆』に当たります。住職不在の中、家族一丸とならなければ大きな山を乗り越えることが出来ませんでした。まさに『禍は福の種、福は禍の種』・『禍は福のよる所、福は禍の伏する所』です。

必要に迫られて、やらざるを得ない事も多く戸惑いましたけど、結局「やればできる」ということですよ。

「できるかできないか」じゃなくて、「やるかやらないか」これに尽きます。

私達1人1人には、その人にしか果たせない役割が与えられていると私は思っています。自分に与えられた仕事や役割をコツコツ一杯全うしていくところに、道は開けてくるものと思います。そこには他人との比較なんてどうでもよくなる世界があります。「あの人は立派な仕事しているのに」それに比べて「自分はダメな人間だ」とか考える必要は全くありません。そうは言っても、比べてしまうのが私達ですが、本当は必要無いので、そこはシツカリ自覚しましょうね。天から頂いた使命や、お役目を各自が全うできるように、死の淵から生還した住職とスクラムを組んで、益々精進させていただきます。人生は人との出逢いが全てです。人とのご縁です。そんなご縁のある皆さま、今後とも宜しくお願い申し上げます。

### ●【人は成長するために生きている】

さて、私は山岡鉄舟の「晴れてよし曇りてもよし富士の山」という歌が好きです。何事にも動じないような強い人間でありたいという理想を持っています。そうなるためにはまず、自分は弱い存在だという事を認めなければならぬと思います。つまり、人と人は支え合いの中で生活しているという事実を、自覚するところから全ては始まると思っています。

私達は時として、落ち込む時もあるけれど、辛くて人知れず泣くこともあると思います。ただ私達は知ってい

るはずですよ。苦難の時にこそ気づける「生かされている」という事実を。弱い存在であるからこそ、周りの人達に支えられている現実を、感謝の念を抱くことが出来ます。そうやって苦しい中から立ち上がった時にこそ、「ありがとう」と感謝して、それを受け入れて、そこから次の一步を踏み出せる自分にもなれますよ。

自分の納得がいけないからといって、簡単に人のせいにしてみたり、堂々と不機嫌な態度を取る人が増えたような気がします。もし納得いかない事があるのなら、なぜ聞こうとしないのでしょうか？なぜ知ろうとしないのでしょうか？なぜ考えようと思わないのでしょうか？全て自分の思い通りにしたい」とばかりに、やれ「アイツが悪い」、これには何の意味もないから自分には必要ない。面倒くさいし、だったらやめてしまえとばかりに、これまでの伝統や文化を簡単に破壊してしまう人がおられる事は、非常に悲しい現実です。

たとえば先月も、こういうことがありました。8月は【お盆】の行事がありました。毎年行っていた【先祖供養】を簡略化させたいと、うちには「塔婆(とうぼ)は要りません」と、わざわざ玄関まで来られて突き返された方が1名おられました。塔婆の意義をご説明している最中にも、「そんなことは聞くまでもない」と、バツサリ切り捨て、なぜか物凄い剣幕で玄関の扉を閉めて、肩を怒らせながらスタスタと駐車場に向かわれまし

た。駐車場に止めてある車に戻られる彼の背中を見つめながら、私は、「ああ、なんと親不孝なこと……『南無妙法蓮華経』」と、思わず手を合わせました。

私達は誰しも、自分が存在しているのは親先祖があったればこそですよ。自分の命の根つことも言える親先祖への感謝の念を込めることができない彼の、いわば貧しい心に、本当の意味での命の火が灯りますようにと、祈らざるを得ませんでした。

親先祖の時代にはこうだったと聞いています。人前で泣いたり、不機嫌な感情を表に出したりすることは厳しく戒められていた、と。

感情を自制することで精神を鍛える事ができます。生きていけば様々な出来事に遭遇します。そこで感情をシツカリと自制するには、ちゃんとしたい願いや覚悟が必要です。心に「生かされている」という自覚を持ち、だからこそ自分はこうやって生きるという信念、守りたい人や物の存在が見えてくるものと思えます。

迷いを断ち、感情を自制するには、美しいものや荘厳なものに触れて、豊かな感性を育むことも大切です。先人の尊い教えに触れ実践していくことで、自らの誇りを育むことにも繋がります。悪い手本はすぐに蔓延していきません。一人一人が自覚を持つことで、よりよい社会を築いていくことを親先祖は願っているのではないかと思います。

●【宗教や祈りは人類の本質的である】

人類はずっと宗教というものを支えにしてきましたが、仏陀が生まれて2千5百年、イエス・キリストが生まれて2千年経つても、戦争や環境破壊に終わりが見えませんか？ 何か抜け落ちていっているのではないかとさえ思います。だからこそ、より強く思います。人知を超えた働きのお陰で私達が生かされている事を自覚して、もっと謙虚に生きなければならぬのではないかと思います。個人の考え方を主張することは大切な事ではありませんが、受け継がれている伝統や文化を見ず聞かず知らずして、自分勝手に、我がままに、投げ捨てるその心を戒める自分でなければいけないと思ふし、まずそこから始まるとも言えるかと思ふます。

そもそも祈りとは、一言で「生命の宣言」です。無力だから祈るのではありません。日本語の「いのり」という言葉の語源は「生宣(いのり)だ」と解釈されています。「い」は生命力(霊威ある力)、「のり」は祝詞(のりと)や詔(みことりの)の「のり」と同じで、宣言を意味します。ですから「いのり」とは、生命の宣言という事になります。人類は、宗教が生まれる前から祈りという行為を続けてきましたけれども、それは祈りに思いも寄らない力がある事を実感していたからなのですよね。アメリカで行われた実験

では、快癒の祈りを行った重病患者は、祈らなかつたグループに比較して病気に何らかの効果があつたという結果も出ています。祈りを含めた意識が、人間に与える影響に迫っています。日々の行(冥想や祈り)によって他者への共感や慈悲の心を育むことは、免疫機能の強化にも何らかの影響を及ぼすことが分かっています。日々の祈りが心理状態を整え、それが積み重なることで遺伝子を介して体に影響を及ぼしているのではないかと推察されています。

心よりも深い「魂」とは何か？これは大問題で、簡単には手を出せないテーマです。しかし太古の昔から人類が認識してきた魂というのは、確かにあります。魂と遺伝子の関係の研究が進めば、祈りの重要性もさらに明らかになってくると思ふます。最後に行き着くところは愛や慈悲ではないでしょうか。親先祖への愛、夫婦愛、家族愛から始まって、社員への愛、仲間への愛、会社への愛、更には地域への愛、全ては愛(仏教では慈悲)に辿り着くものだと思います。愛と好きとは違います。嫌いな人を好きになる必要はないけれども、嫌いな人にも愛を持つて向き合いたいものですね。どの宗教でも共通して説いているのが愛や慈悲と解釈していただければ良いと思ふます。

そんな愛や慈悲があれば、触れ合う相手に対しての言動が変わります。思い遣る気持ち芽生えます。少なくとも、自分の我がままを押し通す

だけの人間にはならないと思ふます。

住職不在の2ヶ月間で確信した世界があります。繰り返しになります。人間は自分の生死を自分でコントロールすることは出来ず、天、即ち神仏や自然といった人知を超えた大いなる力のもとに存在しているという事。遺伝子研究の世界的権威だった故・村上和雄先生のお話によれば、1つの生命細胞がこの世に生を受ける確率は、1億円の宝くじが百万回続けて当たるほど稀有なことがあるそうです。かくも尊い命を与えてくれた天を敬い、同じく尊い命を宿した隣人を自分の家族のように愛し、他の国々とも労り合えば、争いごとは起こりません。これは理想論かも知れませんが、現実には難しい問題であることも承知しています。ただ、理想すら描けない自分には成り下がりがたくないと思ふます。この混沌とした社会情勢の中で、近年驚くべき進化を遂げつつあるAIは、24時間365日、休むことなく知見を吸収し続け、知識の習得において人間がとてども太刀打ちできません。ただし、AIには備えられない愛や慈悲を宿した人間の強みを生かし、先の見えない時代に的確に対処できるような、思い遣りの溢れた支え合いの社会を私達みんなで作っていききたいものです。

合掌 副住職 谷川寛敬

来月のご案内です



◎鬼子母尊神大祭

特別 祈 禱

・ 十月八日 (金)

・ 午後二時より

お誘い合わせの上、お参り下さい